

公衆衛生Books

大塚敦子(著)：『介助犬を育てる少女たち』

●講談社，2012年，1,300円＋税

ここは，カリフォルニアにある少女更生施設の介助犬訓練室。ライトスイッチを埋めこんだ立て板，犬がぐわえられるようにロープを結んだドア，車椅子など，介助犬を訓練するために必要な用具がひとつとおりそろっている。

介助犬は，手や足に障害のある人の日常生活を手助けする犬だ。いっしょに暮らす人にどんな障害があるかによって，介助犬の仕事の内容も変わってくるが，落としたものを拾ってわたす，手が届かないものを持ってきてわたす，ドアの開け閉めをする，電気のスイッチやエレベーターのボタンを押す，洋服の着がえを手伝うなど，ずいぶんさまざまな仕事がある。

手足の不自由な人にとって，自分の手足の代わりとなって動いてくれる介助犬は，生活の大きな支えだ。たとえば，リモコンでドアの開け閉めをしている人にとっては，リモコンを落としたら大変なことになる。ドアを開けられないから，家に入出入りすることもできなくなってしまう。でも，介助犬がいれば，指示ひとつでリモコンを持ってきてもらえるのだ。

毎日の生活が便利になるだけではなく，大きな安心にもなる。車椅子の人が椅子から落ちて動けなくなったとき，すぐに電話を持ってきてくれる介助犬がいたら，どんなに安心だろう。

こんな重要な仕事をする介助犬を，十代の少女たちが訓練していると聞いたら，あなたはびっくりするだろうか。

大人にだってむずかしいだろうに，十代の，しかも，非行をして施設に収容されている少女たちが育てているとしたら――？

だが，これは現在アメリカで，実際におこなわれているプログラムの話である。さまざまな問題や生きづらさを抱える少女たちが，介助犬を育てるうちに，少しずつ変わっていく。

自分のいやなことでも，犬のためだったら，する。すぐには言うことを聞いてもらえなくても，できるまで何度もトライする。

そうやって，犬といっしょに成長していく少女たちの物語なのだ。（本書「プロローグ」より）

